



ガラ紡工場跡（大内町）

目次

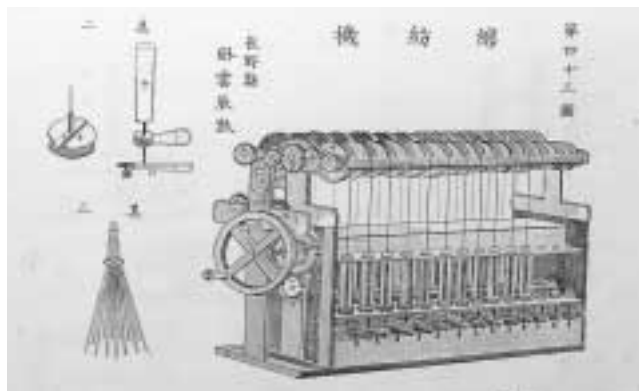
- ・ 豊田の近代化を支えた産業 ガラ紡 ————— 2
- ・ 資料紹介 宇都宮三郎の講演記録「日本工業不幸ノ大原因」 ——— 3
- ・ 心のふるさと無形民俗文化財 祭り・行事・技 とよたの郷土芸能 ——— 4
- ・ 古文書紹介 菅原文書「測量御用ニ付書物控」 ————— 5
- ・ 平成13年度 郷土資料館事業報告 ————— 6
- ・ 「とよたの近代産業遺産」・発掘調査速報 ————— 7
- ・ 文化財シリーズ・資料館ニュース ————— 8

ガ ラ 紡

豊田の産業史の中で、ガラ紡工業は大きな位置を占めるものです。

ガラ紡とは日本独特の紡績技術で、紡機を回すとガラガラと音を出すことから、その名称で呼ばれるようになりました。

ガラ紡機械は、信州安曇出身の臥雲辰致（がうんたち）により明治6年に発明されました。はじめは太糸をつむぐ機械でしたが、明治9年には細糸もつむぐことができるように改良されています。従来の手つむぎに比較し、格段に生産性が向上する画期的な発明でした。この発明は明治10年の内国勸業博覧会に出品され、最高位である鳳紋褒章を受賞しています。



出品されたガラ紡機械
（「明治10年内国勸業博覧会出品解説」より）

当時、木綿の生産地であった三河地方にも早くからガラ紡機械が普及しはじめました。豊田では明治11年、堤村の甲村滝三郎が手回しのガラ紡機械を導入したのが始まりです。その後、高岡地区の中ではガラ紡の発展はみられていませんが、上郷、挙母では昭和30年代初頭まで続けられていました。

豊田でガラ紡が最も発達したのは松平地区です。郡界川筋の桂野村で酒造業を営んでいた宮本六太郎が明治13年、水車動力を利用したガラ紡を手がけたことが始まりとされています。これ以降、明治期では郡界川や仁王川・滝川などの流域で操業が進められました。このような小河川の川筋に発展したのも、当時、盛んに利用されていた米つき水車をガラ紡の動力として転用できた環境が大きいと思われます。

大正期の中頃になるとこの地域にも電力開発が進み



水車（加藤銑三氏：大内町）

始めました。巴川支流の急流と豊富な水量を利用して、水車ガラ紡でしたが、電力を動力とする方式への併用・転換が図られていきました。同時に、水力に依存する条件が不必要となったことから足助街道沿いの鍋田にも工場ができるなど、地区内全域への広がりを見せるようになり、松平地区の主要な産業として発展をしていきました。

戦後は全国的な衣料不足を補う主要産業として、ガラ紡は全国的な広まりをみせるとともに、かつてないほどの好況に恵まれました。この好景気のもと、地区内では次々と新たな工場が操業を始めるようになりました。さらには、朝鮮動乱を契機とした衣料需要の拡大はガラ紡工業の発展につながり、ガラ紡産地が拡大していきます。

産地拡大の傾向は昭和35年まで続きましたが、以降、洋式機械紡績に押され、事業所が急激に減少していきました。地区内では特紡（とくぼう）や反毛（はんもう）に切り替えたり、業種転換あるいは廃業に踏み切る事業所が相次ぐようになりました。



ガラ紡工場（河合和紡績工場：岩倉町）

宇都宮三郎の講演記録「日本工業不幸ノ大原因」

幕末から明治にかけて活躍した豊田市ゆかりの化学・技術者、宇都宮三郎について、彼を主題とした昨年度の特展『舎密から化学技術へー近代技術を拓いた男・宇都宮三郎ー』終了後に、新たに確認した資料を紹介します。

それは、『萬年会第53会記事』（宮城県立図書館蔵）に記載された「日本工業不幸ノ大原因」という題名の記事です。この記事は、明治15年（1882）5月20日に萬年会（萬年会）が主催した講話会（開催場所は不明）において、三郎が講演した内容を記録したものです（第53会記事目録等別記）。

三郎の講演は、会の当日に予定していた講師が事故によって欠席となったため、臨時に三郎が講師となって行われたようです。この講演の中で三郎は、当時の日本において、新しく工業が興っても利益が得られず、次々に廃業していく状況について、その原因として彼が思いついた事柄を述べています。

三郎が思いついた原因は、「日本の工業者盡く見込み悪きに非ず、亦手術の必拙きに非ず。唯無益の利子に責めらるることを知らず、僅に工場を建てれば即ち「ペンキ」を塗り、硝子窓を張り、旗を翻し球燈を懸るが如き虚飾の中に往来疲弊するに過ぎず。」と述べられており、利益が上がらないのは経営の見込みの悪さや技術力不足によるのではなく、無駄な設備投資に費用をかけ過ぎ、かえってその返済利子によって利益を消耗していることが原因であるとしています（「」内引用・句点加筆、以下同様）。

そして三郎は、原因に対する対策として例を挙げながら、「工場を起すに、意味は必欧羅巴に取り、装置は必手近なる物を用い、極て工業費を倏約すべし。」と述べ、理論は西洋技術から摂取し、その実践には日本在来の物・技術を応用して工業を興こし、費用を倏約することであるとしています。

この考え方は、セメントや耐火煉瓦など、西洋で形成された工業を日本に移植する際に、西洋の化学・技術の理論を国内の状況に合わせて独自に応用した三郎の活動と合致しています。

その一方で三郎は、「回顧すれば数年以来命を工作の間に奉じ、起業の措置計画をなすこと勝て数うべからず。然れども唯此の一点に注意を缺たる故、大抵数倍の工業費を用いたり。之を総計せば無益な費用殆数十万円に登るべし。実に寒心の至に堪ず。」と、技術

開発に没頭し、経費を顧みなかった自らの姿勢についても「深く往日の過ちを悔い」ています。

この講演を行った明治15年5月当時、三郎は明治政府の工部省において工部権大技長の地位にあり、翌6月には技官として最高位の工部大技長に昇進します。そのような政府高官の立場にある三郎が、自らの失敗を素直に認め、後の教訓とするようにと述べているのです。近年の官僚にはほとんど見る事ができない潔さが、ここにあります。

萬年会における三郎の講演の記録は、B5版に換算して3枚程度のものですが、当時の三郎の認識を知るとともに、三郎自身の人柄をうかがえる資料として大変興味深いといえます。（天野博之）

「萬年会第53会記事」

○記事目録

石油検査器ノ事
石炭テール途用ノ事
錫器文様ノ事
木醋製造目論見ノ事
硫酸ノ商況
新入会員
日本工業不幸ノ大原因
渡邊君内国周遊中の所見一斑
前号図解補遺

○開催日（第53回は2日に分けて開催された）

1日目 明治15年5月6日 第53会
演 題 「石油検査器ノ事」～「硫酸ノ商況」
出席者 磯長得三・中川謙次郎・大鳥圭介・金子精一・太田豊明・安達重固・伊東信夫・佐野常樹・石藤豊太・田中節・宮森健蔵・平野権兵衛・津田仙・肥田濱五郎・渡邊洪其・下秋元次郎・清田長秋・加藤増雄・新保磐次

2日目 明治15年5月20日 講話会
演 題 「新入会員」～「前号図解補遺」
出席者 大鳥圭介・肥田濱五郎・渡邊洪其・宇都宮三郎・神鞭知常・田中節・磯長得三・小野寺常治・清田長秋・新保磐次・相場空左衛門

とよたの郷土芸能

基礎調査から - 神楽・祭り囃子 -

豊田市には、銭太鼓を始めとして、棒の手、祭り囃子など、県や市の文化財として指定されている民俗芸能が23団体あります。

また、これら以外にも、地域で伝承されているいわゆる郷土芸能が多くあります。こうした芸能は、長い年月のなかで地域の風土と歴史により熟成されたもので、人から人へ、われわれの祖先が大切に受け継いできた文化遺産のひとつです。このなかには他の地方や地域にはみられない貴重なものもあり、豊田市にとって、生きた宝物といえます。

嫁獅子やオマントなど既に全滅してしまったものもあり、神楽やチャラボコなどが現存するものの、その多くが、今後、衰退・消滅の恐れがあります。

豊田市では、平成13年度からこうした市内に残る郷土芸能について調査、記録することとし、初年度の13年度は、豊田市及び周辺に受け継がれてきた郷土芸能の種類や現存している地区などを中心に、基礎調査を行いました。

あわせて、すでに消滅したものについて、郷土芸能の経験者や地域の古老からの聞き取りを主体に調査を実施しましたが、すでに存在すらわからなくなっているものも少なくありません。



囃子車

チャラボコの囃子車が使われなくなって、神社の手水舎の屋根になっている。

1 神楽

① みこ舞

通称「みこ舞」といい、尾張・西三河にのみに見られる里神楽で少女が舞うものです。現在、中根町、堤町、八草町、古瀬間町で囃子が伝承されています。

② 獅子舞（神楽獅子又は嫁獅子）

愛知、岐阜、長野南部に限定的に分布する里神楽で、農村歌舞伎とつながりが深くこの地域にもかなりの数があったものと思われますが、一部地域に獅

子頭が残る程度で、こういった形で行われていたかなど、くわしいことはわかりません。

2 祭り囃子

① 山車囃子

山車の中で演奏する祭り囃子で、豊田の場合、農村歌舞伎の影響が強いと思われます。挙母地区旧8町、高橋町、平井町、百々町、志賀町に現存し、いずれも市の文化財指定を受けています。

② チリカラ

基本的には山車囃子と同じですが、山車ではなく花車や底抜屋台といわれる車の中で演奏されたものです。現在、花車を残すところはなく、下市場に囃子だけが伝承されています。

③ チャラボコ

熱田系里神楽から派生した祭り囃子で西三河南部を発祥とし、豊田が三河の北限と思われます。地域によって様々な歴史・伝承があり、謎の多い郷土芸能です。明治初期に爆発的に流行しましたが、現在笛まで残っているのは、八草町、西広瀬町、石野町、保見町の4団体だけとなっています。



チャラボコ
八草八柱太鼓

地道な伝承活動により平成14年度豊田文化功労賞を受賞されました。

④ 水神囃子

藤沢町の舟万灯で演奏される囃子で、古い時期に伝わった神楽がもとと思われますが、その後、チャラボコ・打囃子の影響を受け、現在の形になったものと思われます。

⑤ 打囃子

チャラボコと岡崎藩の陣太鼓が旭町で融合・発展したもので、豊田の打囃子は近年導入されたものです。地区によってはチャラボコを打囃子というところもあります。

（蟹 一夫）

菅原家文書「測量御用二付書物控」(文化8年3月)

～ 伊能忠敬一行・九久平村へ来る ～

江戸時代の地理学者・測量家の伊能忠敬は、詳細な日本地図をのこしたことで有名です。今でこそ衛星からの映像で日本全体の形を見る事ができ、航空撮影で正確な地図をつくることができますが、こうした技術の無い時代に全国を歩いて測量図を作製した偉業は現在でも多くの人に称えられています。

伊能忠敬は、この地域も測量のために訪れています。この地域の測量に関する資料で地元のにこされたものとしては、拳母藩領の庄屋が書き留めた「天文測量方御通行取計向留帳」が知られています。これは文化8年(1811)3月伊能忠敬一行が名古屋から飯田街道筋を通り、四郷村から南下して拳母城下を訪れた際のもので、四郷村で泊った際の献立や、村々で机や燭台を用意させたり、村人に寝ずの番をさせるなど、受け入れ側の対応がわかるものです。

今回、新たに紹介するのは「測量御用二付書物控」という資料です。



これは九久平村庄屋藤七が提出した書類を、当時の国代官であった菅沼氏が控として書き写したものと思われます。郷土資料館が保管している「菅沼家文書」の中に残されていました。

年代は文化8年3月で、拳母藩領の測量と同じ時期です。この時期は伊能忠敬一行にとっては第7次測量にあたります。この第7次測量は文化6年8月に江戸を出発し中国地方の主な街道、美濃・三河・甲州街道を測量したもので、文化8年5月に測量を終え江戸に戻っています。

この「測量御用二付書物控」は、拳母藩領の記録ほど詳細ではなく、測量に関して幕府から出された触書の写しと一行に提出した九久平村の地理報告の控です。

触書は伊能一行が行く先々の村に対して出したもので、人足と馬を出すように求めたものと、通行困難な場所は船を出して案内し支障のないようにもとめたものです。また村の地理報告は、石高・家数・大きさ・名所・旧跡などを雛型に則して各村に報告させたもので、ここから当時の九久平村の様子を知ることができます。

(以下部分抜粋)

高230石

家数89軒 内33軒本村・21軒枝郷字菅沼・
11軒同山中・24軒同鵜瀬

村長 東西29丁28間(約3.2km)

南北26丁10間(約2.8km)

村内往還 16丁半(約1.78km)

但し中村境より大給村境迄

川向往還筋 8町24間4尺

但し岩倉村枝郷平古境より

赤原村境迄九久平村分道大樹也

川巾 35間

但し川上足助より流出末矢作川へ落入申候

東国額田郡岡崎御城下伝馬町へ3里半

同国賀茂郡築山村妙昌寺へ1里7丁

同賀茂郡松平郷御屋舗へ2里

寺2ヶ寺 内禅宗吉祥院 浄土宗高德寺

神明宮1社 天王1社 庚申堂1ヶ所

観音堂1ヵ所 山ノ神1ヵ所

弁財天1ヵ所 阿弥陀堂1宇

名所無御座候 旧跡無御座候 名産無御座候

古城跡無御座候

但し当地頭先祖御居住之

古屋敷跡二御陣屋御座候

猿投山見渡方角 北凡4里

六所山見渡方角 東凡2里

この報告を村の者が岡崎御本陣へ持っていった後、一行が村へ測量に訪れた様で「中垣内五七衛門方御泊り又九久平村伴蔵方御宿也、夫より大嶋村川合甚左衛門方御宿」とあり、中垣内村で休息し九久平村で宿泊したことがわかります。その後一行は大嶋村(現足助町)へ向かいましたが、測量日記によると巴川を渡り岩倉・赤原・古瀬間村等を測量し北へ向かったことがわかります。九久平村では一行に対して馬4疋、人足38人を出して協力しました。(伊藤智子)

平成13年度 郷土資料館事業報告

平成13年度に豊田郷土資料館が行いました事業を報告します。

1 文化財保護審議会（4回開催）

審議会委員改選委嘱

〔調査〕鈴木正三史跡指定調査

六鹿邸現況調査

〔研修〕美濃加茂市民ミュージアム、岐阜県博物館
視察研修

田原町博物館「発掘された日本列島2001」視察研修

豊田教育事務所管内文化財保護審議会委員
合同研修（豊川市）

2 文化財指定

琴平町シデコブシ群生地

（13年6月1日市天然記念物指定）

面積 11,818m²

3 展示

入館者合計 7,033人

特別展

「舎密から化学技術へー

近代技術を拓いた男・宇都宮三郎ー」

788人入場

13年11月3日～13年12月2日

展示図録の刊行

記念講演 道家達将先生

（東京工業大学名誉教授）

「宇都宮三郎の生涯と業績」

企画展

「とよた発掘ファイル2001」

13年5月12日～9月2日 2,078人入場

「郷土の俳人展」

14年2月1日～4月14日 2,032人入場

4 補助事業

岩倉神社舞台（中金町）修理、辻堂（市木町）屋根
葺き替え事業補助、渡辺半蔵守綱画像（県指定・守綱

寺蔵）修復事業補助、棒の手、山車、囃子維持保存
事業補助、郷土の先人顕彰事業補助

5 資料購入

猿投神社文書複製、宇都宮三郎著『築竈論』、新聞
「中外新聞」、広告「目薬精錡水」、又日庵作茶杓

6 埋蔵文化財

梅坪遺跡（高宮公園用地）吉兼1号古窯発掘調査、
鳳面館跡、渡刈町地区試掘、舞木廃寺基準点測量、
古城遺跡、花本・万加田遺跡、滝1号墳、勘八2号
墳出土品整理、滝1号墳移築工事、曽根遺跡復元家
屋葺き替え修繕、花本・万加田遺跡報告書刊行



葺き替え後の曽根遺跡

7 資料調査

近世文書・岩倉町宇野家

近代文書・鷺鴨町区有

昭和史資料調査

その他

豊田史料叢書・鈴村家文書（上巻）豊田の石造文化
財刊行

博物館実習生受入 7月（7日間）

郷土資料館だより 4回発行

ホームページ開設

〔<http://www.toyota-rekihaku.com>〕

「とよたの近代産業遺産」

「近代産業遺産」という言葉は、まだ一般にはあまりなじみがないかも知れません。この言葉は、江戸時代末期から第二次世界大戦終了時まで近代的手法によって造られた、産業・交通・土木に関わる建造物(各種の構築物、工作物を含む)を指す「近代化遺産」と、建造物に限らずより広い範囲の、産業革命後の人々の営みや生業の中から生まれた、後世に継承していくべき文化的な資産を指す「産業遺産」を総称するものです。

つまりここで述べる「近代産業遺産」とは、近代の人々が営んできた産業に関わる活動を具体的に示す機械や道具類・建造物・記録類、そしてそれに関わった人々の技術・生活資料などのうち、今日に残されているモノです。

「遺産」という言葉からは、時代遅れ、古臭い、というマイナスイメージがつきものですが、近代産業遺産の「遺産」は、「継承していくべき資産」という意味合いが強く、現在でも機能を果たしているものも、その歴史性から近代産業遺産に含まれる事があります。近代産業遺産は、近代以降の地域の生活や文化の変遷を、生産に関する視点から映し出してくれます。したがって、近代産業遺産を見ることによって、地域の発

展過程を理解することもできます。

それでは、豊田市域にはどのような近代産業遺産があるのでしょうか。

現在では「自動車の町」として、自動車産業の印象が強い豊田市ですが、自動車産業が豊田市域に進出し隆盛となる以前から、特色のあるさまざまな産業が地域の状況にあわせて形成され、発展していました。例を挙げれば、養蚕・絹糸生産、綿糸生産(ガラ紡)製瓦や、陶土・耐火粘土・石材採掘などの鉱業、石粉生産(トロンメル)その他にも百々貯木場、明治用水頭首工、枝下用水、発電所などがあります。

企画展「とよたの近代産業遺産」では、写真パネルや当時の資料を交えて、豊田市域に残るこれらの遺産の一端を紹介したいと考えています。

皆様のご来場をお待ちしています。また、近代産業遺産に関する情報をお寄せください。

開催期間：7月20日(土)～9月1日(日)

場 所：郷土資料館 第2展示室

◆『とよたの近代産業遺産』見学会を8/22(木)に行います。詳しくは郷土資料館まで。

発掘調査速報

○三ッ塚〔永覚町高根〕

愛知環状鉄道永覚駅のすぐ目の前にある田地の中に2基の塚がひっそりと並んでいます。直径1.8m、高さ50cmほどの小さな土饅頭で、注意しなければ気づかないかも知れません。かつてはもう一つ土饅頭があり、そのため「三ッ塚」と呼ばれていました。「上郷風土記」によれば、室町時代の戦没者の墓であるとか、「首塚」との言い伝えもあるそうです。

今回道路の改良に伴って現存する2基のうち1基が工事区域にかかるため、事前に発掘調査をすることとなり、5月13日・14日に実施しました。

調査ではマウンドを断ち割り、断面土層の観察、出土したものの採集をしました。マウンドの盛土を25cmほど掘削すると地山が検出されました。マウンドの半分が地山ということは、耕作のために塚を残して周りを掘り下げたためでしょう。しかし塚内部及び下部から埋納施設等は発見されず、盛土内から出土したもの

は、陶器片が数点と極めて乏しいものでした。残念ながら、調査結果から塚の性格を判断するのは難しいと言わざるを得ません。

今回の調査によって、三ッ塚は3基のうち一番南に位置する1基を残すのみとなってしまいました。永い年月を土地の人々と共に歩んできた文化財です。大切にしたいものです。



調査前の塚の状況

旧井上家住宅西洋館は勘八峡のほとり、豊田市民芸館の敷地内にあります。市内で明治時代の洋風建築を伝える唯一の建築物です。井上町の井上五郎氏の住宅をここに移築

して保存しています。明治時代の洋風建築の特徴を示す丸窓や菱格子の天井、彫刻を施した柱頭飾り、ベランダを配したモダンな建物です。

井上家はその個人の姓が現在の町名になっているほどの名家で、猿投地区の近代開発の歴史に大きくその足跡をのこしています。移築保存した西洋館は名古屋市内から移築され、井上家の開墾農場の迎賓館として、また居宅として長く使用さ



文化財シリーズ

40

旧井上家住宅西洋館
(登録文化財)

れていました。しかし建設された場所が井上家の自然林の中ということもあり、ほとんど人の目に触れることなく昭和62年まで経過しました。長い年月で建物は老朽化。廃屋同然で取り壊

し工事をする直前に、市が復元し保存することが決まりました。調査の結果、当初名古屋の博覧会のために建設されたものという伝承や、その後銀行として使用していたことが浮かび上がってきました。典型的な明治建築で時代は明治10年代。当時の銀行の様子を知ることができる貴重な資料と判明しました。また平成12年には、豊田市初の登録文化財になりました。

資料館NEWS

平成14年度特別展・企画展のお知らせ

◆特別展(豊田市郷土資料館)

『川をめぐるくらし(仮称)』

期間：平成14年11月3日(土)～平成14年12月15日(日)

内容：川にまつわる様々な資料を紹介します。古い漁具や舟をお持ちの方は郷土資料館までお知らせください。

◆企画展(豊田市郷土資料館) 第2展示室

①『とよたの近代産業遺産』

期間：平成14年7月20日(土)～9月1日(日)

内容：豊田の近代産業及び近代遺産をパネルや当時の資料等から紹介します。入場無料です。

②『館蔵品展(仮称)』

期間：平成15年3月1日(土)～5月5日(月)

内容：郷土資料館の収蔵品のなかから紹介をします。

◆企画展(猿投棒の手会館) 特別展示室

『猿投山の自然と風物展』

期間：平成14年5月24日(金)～9月1日(日)

内容：猿投山に生きる鳥類・魚類・昆虫類・菌類を写真パネル等で展示します。入場無料です。

刊行物のご案内

◆豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第20集

『花本遺跡・万加田遺跡』 2,800円

花本遺跡では奈良時代住居跡が発見、万加田遺跡では、縄文時代中期の資料が発見されました。

◆豊田市歴史民俗調査報告書 第1集

『豊田市の石造文化財』 1,800円

市内にある石仏・道標・常夜燈など、石造物の調査報告です。

◎ご希望の方は郷土資料館までお問合せ下さい。

郵送販売もしております。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.40■

平成14年6月15日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com